

(様式2)

2020年度 教育活動活性化提案事業 実施結果報告書

令和3年3月31日

福岡女子大学学長 殿

申請者

所属名

国際教養学科

職名

准教授

氏名

吉田信

印

事業名 (テーマ)	<input type="checkbox"/> 文理統合 <input checked="" type="checkbox"/> 国際性 <input type="checkbox"/> リーダーシップ <input checked="" type="checkbox"/> 伝統・歴史・感性 <input type="checkbox"/> その他 ※いずれかにチェック☑を入れてください。		
事業実施者及び 事業分担者	吉田信	大学院生及び 学外協力者等	
活動内容及び成果(必要に応じ資料、写真等を添付すること) ※この欄の記載は、大学ホームページ等にそのまま掲載する予定です。 (活動内容)  2020年度の事業は、コロナ・ウィルスにより海外渡航が極めて困難になる中、当初の事業計画を大幅に変更して実施せざるをえなかった。アウシュヴィッツを中心とする国外研修ではなく、日本国内でホロコーストと関わる展示をおこなっている博物館・記念館を訪問先として、コロナウィルスの感染状況を見据えつつ3月9-12日の日程で国内研修を実施した。参加者は5名、内訳は引率者1名と学生4名である。訪問先として選択したのは以下の施設である。  1. 人道の港 敦賀ムゼウム(福井県敦賀市) 2. 立命館大学国際平和ミュージアム(京都市) 3. ホロコースト記念館(広島県福山市) 4. 広島平和記念資料館(広島市)  これらの施設を選んだ理由としては、ホロコーストと密接に関わる博物館・記念館を選ぶだけにとどまらず、ホロコーストをより広い国際政治の歴史に位置づけることを意図したためである。  (成果)  4箇所の施設の訪問を通して、3年ゼミで学んできたホロコーストについて、一方では具体的な土地や事実と、他方では大局的な国際政治の流れと関連付けながら理解を深める機会を提供できた。座学での学びであっても、学外の様々な施設を訪ねることで、半ば常識化した既知の情報を改めて検討するきっかけとなる。 一つだけその例をあげるとするならば、敦賀のムゼウムは、ユーラシア大陸の東端であるウラジオストクから乗船した多くの難民の上陸地点としての歴史を有する。この歴史的事実自体、日本国内でも知られているとは言い難いのに加えて、敦賀は杉原千畝の発給したビザを手にシベリア鉄道を乗り継ぎウラジオストクから乗船したユダヤ難民の上陸地でもあった。参加者の誰もが杉原ビザについては知っていたものの、そのビザを取得した人たちのその後については想像が及んでいなかった。敦賀のムゼウム訪問を通じて、研修の参加者は歴史的事実を一連の過程において理解することの大切さを強く感じていた。 ホロコーストの歴史をテーマとする教育活動活性化提案事業も今回で3回目となり、本来であれば正規課程化に進む段階ではあるものの、本事業担当者の都合により継続することが困難になってしまうことが残念である。これまでの事業に対して理解を示してくれた方々、訪問先での学生間交流の実現に尽力して下さった方々への感謝の意を表しておきたい。有意義な事業が今後も継続されることを望むものである。			